

# 伝益田元祥所用「白地横縞模様木綿帷子」(個人蔵)に 関する一考察

## —安土桃山・江戸時代初期における上層武家の木綿使用の実態—

A Study on "White Cotton Kosode with Design of Horizontal Stripes Owned  
by Masuda Genosho" (Private Collection)

—The actual situation of cotton use by upper-class samurai class in the  
Azuchi-Momoyama period to early Edo period—

長崎 巖

Iwao NAGASAKI

### はじめに

安土桃山時代から江戸時代初期の益田家当主・益田元祥所用とされる「白地横縞模様木綿帷子」は、各部の法量とこれらがもたらす形状の特徴、及び仕立ての特徴などから、安土桃山時代から江戸時代初期に至る時期に制作されたと推測される作品である。また注目すべきは、裏地を付けない帷子でありながら、麻ではなく木綿で仕立てられている点で、当時における衣服への綿布使用の希少な事例としても重要な作品といえる。

鳥根県益田市文化財課からの依頼により調査の機会を得たので、調査によって知りえた事実をここに示すとともに、染織史・服飾史の観点からこの作品の特徴と制作年代を明らかにし、文化史的観点からの歴史的な位置づけを行いたいと考える。またこの時期には上層武家の戦衣にも木綿を使用したものが見られるため、そうした事例も紹介しつつ、安土桃山・江戸時代初期における木綿使用の実態を概観する。

### 1. 「白地横縞模様木綿帷子」(挿図1.2.3)の 素材・仕立て・法量等

生地は素材は、織密度1cm四方に経糸19本、細手の緯糸15本と太手の緯糸2本を配して横縞

模様を織り表した平組織の木綿布である。反物から裁断した長めの生地と短めの生地をともに肩山で前後に折り曲げて背中央と脇で縫い合わせて身頃と袖を作る。また同じく反物から切り出した生地を身頃に縫い付け、裾と襟を作っている。

法量は、身丈133.3cm、衿72.0cm、前身幅35.5cm、後身幅36.3cm、袖幅36.2cm、袖丈48.0cm、袖口20.5cm、裾下り8.5cm、裾幅19.2cm、襟幅14.2cm、襟肩明(註1)16.0cm、立衿43.1cmである。

身頃、袖とも生地の両側が織耳となっており、生地幅いっぱいを使って仕立ててあることがわかる。実測した後身幅36.3cm、袖幅36.2cm、身頃と袖の縫い代が約0.5cmであることから、生地幅は約37cm前後であることがわかる。

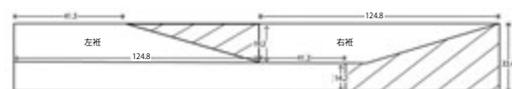
裾は、右裾では身頃側(長辺)が織耳、打ち合わせ側(短辺)が裁ち目となっており、左裾では身頃側(長辺)が裁ち目、打ち合わせ側(短辺)が織耳となっている。また襟は片側織耳、片側裁ち目の生地を二つ折りして身頃と裾に縫い留めている(挿図4)。

このことから、反物から切り出される前は、裾に用いられている二枚の裂は、上下方向を同じにしなが、左右を反対にして上下に配置され、襟に用いられている裂は、これら二枚の横に並べるように配置されていたと推測される。





挿図5-1 裁断図・全体（単位cm、図に示す法量は縫い代を含まない）



挿図5-2 裁断図・部分（単位cm、図に示す法量は縫い代を含まない）

## 2. 近世の小袖形衣服の形状的特徴と時代的変遷

室町時代末期から江戸時代初期（1550年代～1630年代）にかけての小袖形衣服（広義の小袖）においては、絹地で仕立てられたものを「小袖」（狭義の小袖）と呼び、麻地で仕立てられたものを「帷子」と呼んだが、「帷子」という言葉は本来、裏地を伴わないひとえの小袖形衣服の総称であった（註2）。

小袖も帷子も基本的な形状が同じであるがゆえに「広義の小袖」に分類されているが、その基本的な形ができあがった室町時代末期以降、江戸時代末期まで、時代とともにその形状は少しずつ変化してきた。主に、縫い合わされている身頃・袖・衿・襟の寸法や他の部分との相対的な比率、また袂の形などの変化である。ゆえに、これらに注目することによって制作年代の判定もある程度できる。

もちろん実際の時代判定に当たっては、これに加え生地の種類（註3）や使用されている加飾技法（註4）、模様の特徴（註5）などの要件も基準となるが、使用される生地や技法、模様が多様に変化するの江戸時代前期以降であり、室町時代末期から江戸時代初期にかけては、変化が少なく、また現存作品が少ないことから細かな年代判定は容易ではない。

今回、調査・研究対象とした「白地横縞模様

木綿帷子」は、麻ではなく木綿で仕立てられてはいるが、裏地を伴わないことから言えば、本来「帷子」と呼ばれるべきものである。また生地幅が、室町時代末期から江戸時代初期に制作年代が比定されている帷子の生地幅とほぼ近い寸法を有していることから、仕立てにおいても麻地の帷子のそれに準じている可能性が高い。そこで、これを踏まえて、「白地横縞模様木綿帷子」の形状の特徴について述べる前に、室町時代末期から江戸時代に至る麻地の帷子と小袖に見られる形状の時代的变化と、小袖と帷子の間に見られる相違点を整理しておく。表1は、前出神谷栄子『日本の美術No.67 小袖』、山辺知行・神谷栄子『上杉家伝来衣裳（日本伝統衣裳、第1巻）』、水上嘉代子「黒地小花模様小紋帷子について」『ミュージアム』第519号、河村まち子・北島恭代「江戸時代着物の裁ち方に関する一考察」『共立女子大学家政学部紀要』第38号に掲載されている法量を引用し作成したものである。

まず小袖にあっては、室町時代末期から江戸時代初期にかけての時期とそれ以降では袖幅と後身幅の比率が大きく異なる。江戸時代前期以降では袖幅と後身幅の比率は、ほぼ1対1であるのに対し、室町時代末期から江戸時代初期の小袖では両者の比率は1対1.7から1.8である。これは40cm強あった絹生地から各部分を裁断するに際しての反物上での各部分の配置が、江戸時代初期以前と後で大きく異なったためである。

一方、帷子では、江戸時代前期以降も初期以前も袖幅と後身幅の比率は、ほぼ1対1で変わらない。これは反物の幅が35cmほどと、麻が絹よりも狭かったことが起因している。日本人の体形に合わせると、これがそれぞれ左右の身頃を構成するのに最低限の寸法であり、時代にかかわらずこれをそのまま使用するしか帷子を仕立てる方法はなかった。

これに対して生地幅が40cm強あった絹地においては、これをそのまま身頃に用いればゆった

りと胴体を覆うことができるが、袖はその半分ほどの幅にしないと手首を袖口から出せなくなる。そこで袖と襟を並べて一幅から裁ち出すのが江戸時代初期以前の小袖である。ただ、江戸時代前期以降になると、一幅をそのまま使うのではなく、体に合わせた狭い身幅に裁断して身頃を作り、これとほぼ同寸かやや幅の広い袖を裁ち出して仕立てた。

こうしたことを踏まえると、小袖において時代判定の決定的な基準となる袖幅と後身幅の比率も、帷子についてはそれほど時代判定の有力な情報とは言えない。

ただ、室町時代末期から江戸時代を通じて、小袖と帷子で法量の値や各部の法量の比率において共通する時代的特徴や変遷を見出すことができる部位があることが、これまで明らかになっている。但し、男女では時代によっては着装に違いが現れることもあり、例えば18世紀後半以降、裾を引いて着装するようになる女性では、この時期以降、丈がそれまでの時期に比べて長くなるが(註6)、男性においては着装が変わらないため、18世紀の前半以前と後半以降で丈の法量は大きく変わらない。

袖丈も、男女ともに振袖仕立てとなっている一つ身や四つ身といった子どもの着物以外では、男性の小袖や帷子に振袖仕立てがないのに対し、女性の小袖や帷子には振袖仕立てのものが、これらにおいては、袖丈は通常の小袖や帷子に対して倍以上の法量を持つのが一般的である。

作品名称	所蔵者	時代・推定年代
小袖 (男性)		
紫白地竹雀紋散模様綾小袖	上杉神社	室町~安土桃山時代・1550年代~70年代
茶地竹雀紋散模様綾小袖		
白地竹雀紋散模様綾小袖		
平均		

萌黄地桐丸紋散模様綾小袖	宇佐神宮	安土桃山時代・1560年代~80年代
--------------	------	--------------------

紺練綿地梅模様小袖 (徳川家康所用)	徳川美術館	安土桃山~江戸時代・1600年代~10年代
浅葱練綿地扇模様小袖 (徳川家康所用)	徳川美術館	安土桃山~江戸時代・1600年代~10年代
平均		

紗綾小袖 (徳川秀忠所用)		江戸時代・1632年以前
平絹小袖 (徳川秀忠所用)		江戸時代・1632年以前
平均		

黒羅子地小袖 (伝片倉重長所用)	片倉家	江戸時代・1650年代
------------------	-----	-------------

白平絹地小袖 (伝徳川光圀所用)		江戸時代・1680年代~90年代
紺平絹地小桜模様小紋小袖		江戸時代・1690~1700年代
平均		

白綾地単衣 (徳川家慶所用)		江戸時代・1840年代~50年代
緋綾斗目 (伝徳川斉昭所用)		江戸時代・1850年代
平均		

小袖 (女性)		
黒紅染分輪子地松皮菱段模様小袖	京都国立博物館	江戸時代・1620年代~30年代
染分輪子地風景四季草花模様小袖	カネボウ株式会社	江戸時代・1620年代~30年代
染分輪子地風景花卉模様小袖	田畑喜八	江戸時代・1620年代~30年代
平均		

黒羅子地花卉模様小袖	東京国立博物館	江戸時代・1640年代~50年代
黒羅子地闘斗龍模様小袖	東京国立博物館	江戸時代・1640年代~50年代
黒羅子地桐唐草入大葉模様小袖	国立歴史民俗博物館	江戸時代・1640年代~50年代
平均		

墨金輪子地花丸模様小袖	東京国立博物館	江戸時代・1680年代~1690年代
白羅縷地衝立鷹様振袖	東京国立博物館	江戸時代・1700年代~1720年代
平均		

納戸縮緬地宇治橋模様小袖	東京国立博物館	江戸時代・1790年代~1820年代
--------------	---------	--------------------

帷子 (男性)		
作品名称	所蔵者	時代・推定年代
黄麻地小花模様小紋帷子	上杉神社	室町~安土桃山時代・1550年代~70年代
浅葱麻地帷子	上杉神社	室町~安土桃山時代・1550年代~70年代
浅葱麻地帷子	上杉神社	室町~安土桃山時代・1550年代~70年代
黄麻地小花模様小紋帷子	上杉神社	室町~安土桃山時代・1550年代~70年代
平均		

白木綿地横縞模様帷子	益田家	
------------	-----	--

黒茶地小花模様小紋帷子	喜多院	江戸時代・1620年代~30年代
-------------	-----	------------------

帷子 (女性)		
白麻地橘岩波模様帷子		江戸時代・1750~90年代
浅葱麻地清水風景模様帷子		江戸時代・1750~90年代
平均		

白麻地松竹梅鶴亀模様帷子		江戸時代・1800~50年代
白麻地桜紅葉菊雲模様帷子		江戸時代・1800~50年代
白麻地枝垂桜牡丹雲模様帷子		江戸時代・1800~50年代
白麻地藤岩躑躅模様帷子		江戸時代・1800~50年代
白麻地藤雲模様帷子		江戸時代・1800~50年代
紺麻地折枝模様帷子		江戸時代・1800~50年代
平均		

紺麻地楓撫子模様帷子		明治時代・1860~90年代
紺麻地秋景引綱模様帷子		明治時代・1860~90年代
平均		

伝益田元祥所用「白地横縞模様木綿帷子」(個人蔵)に関する一考察

表1 近世初期小袖服飾法量表(単位cm)

身丈	衿	前身幅	後身幅	法量													身丈と袖丈の比率	布幅
				後身幅に対する前身幅の比率	袖幅	袖幅に対する後身幅の比率	身丈に対する立接の比率	袖丈	袖口	裾下り	裾幅	襟幅	襟肩明	立接				
1300	600	37	38.5	0.96	21.5	1.79	0.31	47.5	17.0	140	25.0	14.0	13.0	40.0	0.37			
1290	57.0	36	37.0	0.97	21.0	1.76	0.28	49.5	21.2	130	22.0	15.0	13.5	36.2	0.38			
125.0	57.0	37.5	37.0	1.01	20.5	1.80	0.28	47.0	21.5	152	20.5	13.5	12.0	34.5	0.37			
125.0	58.0	36	37.5	0.96	20.5	1.80	0.30	47.0	20.0	127	21.0	12.7	14.5	38.0	0.37			
126.0	59.0	37	37.5	0.99	21.5	1.70	0.28	46.5	21.0	120	23.0	13.5	14.5	35.7	0.37			
133.0	58.0	39.5	38.0	1.04	20.0	1.90	0.28	48.5	20.5	140	20.0	15.5	12.0	37.0	0.37			
131.0	60.5	36.6	39.5	0.93	23.0	1.70	0.31	45.5	21.0	135	24.0	13.0	12.0	41.0	0.35			
131.0	57.5	37.8	36.5	1.04	20.5	1.80	0.26	45.0	20.5	100	23.0	13.0	14.0	34.0	0.34			
127.0	57.5	37.8	37.0	1.02	20.5	1.80	0.28	48.5	21.2	140	22.8	13.0	15.0	35.5	0.38			
128.6	58.3	37.2	37.6	0.99	21.0	1.78	0.29	47.2	20.4	132	22.4	13.7	13.4	36.9	0.37			
124.4	61.0	34.7	38.5	0.90	22.5	1.71	0.30	45.5	26.2	13.5	21.4	14.0	12.0	40.0	0.37			
138.0	64.5	37.5	37.5	1.00	27.0	1.39	0.25	51.5	23.0	90	24.0	17.0	14.0	34.5	0.37			
132.0	61.5	38.5	39.0	0.99	22.5	1.73	0.28	50.0	21.5	90	23.5	14.0	14.0	37.0	0.38			
135.0	63.0	38.0	38.3	0.99	24.8	1.56	0.27	50.8	22.3	90	23.8	15.5	14.0	35.8	0.38			
135.0	59.0	37	36.0	1.03	23.0	1.57	0.26	53.0	21.5	100	24.0	15.0	14.0	35.5	0.39			
130.0	58.5	39	36.5	1.07	23.0	1.59	0.24	46.0	-	120	24.0	15.0	-	31.0	0.35			
132.5	58.8	38.0	36.3	1.05	23.0	1.58	0.25	49.5	21.5	11.0	24.0	15.0	14.0	33.3	0.37			
135.0	66.0	36	39.0	0.92	27.0	1.44	0.31	48.0	18.0	9.0	22.0	15.5	15.0	42.0	0.36			
140.0	40.5	40.5	40.5	1.00	29.0	1.40	0.32	47.0	19.5	10.0	24.5	14.0	14.0	44.5	0.34			
132.0	62.0	27	30.0	0.90	32.0	0.94	0.44	46.0	26.5	15.5	17.0	13.0	15.5	58.0	0.35			
136.0	51.3	33.8	35.3	0.95	30.5	1.17	0.38	46.5	23.0	12.75	20.8	13.5	14.8	51.3	0.35			
128.0	61.0	32	32.5	0.98	29.0	1.12	0.43	45.0	24.5	18.5	19.5	10.0	16.5	55.5	0.35			
139.0	65.5	26.5	32.0	0.83	33.5	0.96	0.49	49.0	26.0	18.0	18.0	11.5	16.5	68.0	0.35			
133.5	63.3	29.3	32.3	0.91	31.3	1.04	0.46	47.0	25.3	18.25	18.8	10.8	16.5	61.8	0.35			
142.5	63.5	-	37.5	-	26.0	1.44	-	53.0	-	-	-	14.0	7.5	-	0.37			
143.5	60.5	-	32.0	-	28.5	1.12	-	52.0	-	-	-	11.5	-	-	0.36			
137.6	56.6	-	30.4	-	26.2	1.16	-	40.0	-	-	-	-	12.5	-	0.29			
141.2	60.2	-	33.3	-	26.9	1.24	-	48.3	-	-	-	12.8	10.0	-	0.34			
145.0	64.0	-	34.0	-	30.0	1.13	0.42	42.0	-	-	20.5	13.0	-	60.5	0.29			
140.8	64.6	-	31.6	-	33.0	0.96	-	49.8	-	-	-	13.4	-	-	0.35			
148.0	63.0	-	32.4	-	30.5	1.06	0.48	55.5	27.4	8.4	20.0	13.5	9.8	71.0	0.38			
144.6	63.9	-	32.7	-	31.2	1.05	0.45	49.1	27.4	8.4	20.3	13.3	9.8	65.75	0.34			
155.0	63.9	31.0	33.0	0.94	30.5	1.08	0.43	44.0	24.5	15.0	20.0	15.5	16.8	67.0	0.28			
160.5	63.0	30.4	32.2	0.94	30.3	1.06	0.45	67.0	23.0	13.5	20.0	11.2	21.0	71.8	-			
157.8	63.5	30.7	32.6	0.94	30.4	1.07	0.44	55.5	23.8	14.25	20.0	13.4	18.9	69.4	0.28			
158.6	60.8	24	30.3	0.79	31.4	0.96	0.52	50.0	20.5	23.0	17.8	11.5	19.8	82.6	0.32			
141.0	66.5	35.0	34.5	1.01	32.0	1.10	0.26	50.0	21.5	17.0	20.2	13.7	13.7	37	0.36	35.5		
150.0	65.5	35.0	35.0	1.00	31.5	1.10	0.25	48.0	22.5	12.0	18.0	14.5	14.0	37	0.32	36.0		
141.5	65.5	34.0	34.5	0.99	31.0	1.10	0.25	47.5	22.0	10.0	19.0	14.0	13.0	36	0.34	35.5		
144.5	63.0	33.0	33.0	1.00	31.0	1.10	0.24	48.0	22.0	12.0	17.0	14.0	14.0	35	0.33	33.5		
144.3	65.1	34.3	34.3	1.00	31.4	1.10	0.25	48.4	22.0	12.75	18.6	14.1	13.7	36.25	0.3	35.1		
133.3	72.0	35.5	36.3	0.98	36.2	1.00	0.32	48.0	20.5	8.5	19.2	14.2	16.0	43.1	0.36	37.0		
136	61.3	31.7	32.4	0.98	32.8	1.02	0.42	46.3	25.0	8.0	18.0	13.8	12.2	56.7	0.34	33.5		
160.6	64.5	28.7	32.5	0.88	32.5	1.00	0.48	46.0	25.0	19.0	20.0	12.0	20.0	77.5	0.29			
163.0	59.5	24.0	28.8	0.83	31.0	0.93	0.53	42.8	20.0	19.2	19.0	10.8	16.6	86.0	0.26			
161.8	62.0	26.4	30.7	0.86	31.8	0.97	0.51	44.4	22.5	19.1	19.5	11.4	18.3	81.8	0.27			
160.8	61.4	25.0	30.0	0.83	31.4	0.96	0.55	43.0	23.5	18.8	17.0	12.0	18.8	88.7	0.27			
152.5	60.0	24.0	28.6	0.84	30.0	0.95	0.50	46.5	22.6	24.3	15.0	11.7	18.4	77.0	0.30			
154.7	58.4	24.0	27.5	0.87	30.2	0.92	0.50	92.4	20.6	21.0	14.4	11.0	16.2	78.0	0.60			
169.4	60.0	24.7	28.6	0.86	31.5	0.91	0.55	45.7	22.3	22.4	18.8	11.4	17.4	93.5	0.27			
171.4	61.0	23.4	29.3	0.80	31.4	0.93	0.56	45.0	22.5	20.0	18.5	11.3	18.2	96.6	0.26			
167.4	59.8	23.0	28.5	0.81	32.0	0.89	0.55	42.8	20.0	21.0	18.5	11.8	16.6	91.5	0.26			
162.7	60.1	24.0	28.8	0.84	31.1	0.93	0.54	52.6	21.9	21.3	17.0	11.5	17.6	87.6	0.33			
161.1	60.6	23.3	30.0	0.78	30.4	0.99	0.53	45.0	23.0	24.7	16.2	11.7	20.0	84.6	0.28			
172.9	60.3	23.2	30.1	0.77	30.8	0.98	0.49	44.0	22.7	24.0	20.2	14.6	20.0	85.0	0.25			
167.0	60.5	23.3	30.1	0.77	30.6	0.99	0.51	44.5	22.9	24.4	18.2	13.2	20.0	84.8	0.27			

## 2-1. 後身幅・前身幅・袖幅

後身幅は、室町時代後期から江戸時代初期の小袖（絹製）と帷子（麻製）においては、縫い代を含んでほぼ生地幅いっぱいを用いているのに対し、江戸時代前期から後期（17世紀半ば～19世紀前半）にかけては、体に合わせて後身幅を狭く使う傾向があったことが現存遺品から分かっている。但し、絹と麻では一般に用いられていたものでは生地幅が異なり、それが同時代の小袖と帷子で後身幅の法量に差違を生じている。

一方、前身幅は時代と共に生地から裁ち出す法量に変化が見られ、室町時代後期から江戸時代初期の小袖と帷子においては後身幅と前身幅が近い数値を示すのに対し、江戸時代前期以降（17世紀半ば～19世紀前半）の小袖と帷子においては、後身幅に対する前身幅の比率は時代とともに小さくなる傾向が見られ、それは男性よりも女性の小袖と帷子において著しい。着姿をどのように見せるかという女性の美意識がタイトフィットの着姿へ女性たちを向かわせたと考えられ、18世紀以降、幅広の帯を締めるようになるのも同様の意識に基づくものと推測される。

前述のように袖幅に対する後身幅の法量比は、小袖においては、男女にかかわらず江戸時代初期以前が1.7～1.8であるのに対し、それ以降は1.0前後と大きく変わるが、帷子においてはそれほど大きくは変わらない。但し詳細にみると、帷子においても袖幅に対する後身幅の比率は、江戸時代初期以前がほぼ1.0前後であるのに対し、江戸時代前期以降は0.7～0.8前後にわずかではあるが小さくなる傾向があり、それは江戸時代前期から中期以降の小袖においても見られる。これは袖幅よりも身幅のほうが狭いということであり、胴体部分を覆う身幅を少し狭くしてタイトフィットにしようとする意図が窺われる。

## 2.2 衽幅・襟幅

胴体部分の前面を覆うために前身頃に加えられている部分が衽である。胴体をゆったり包むルーズフィットが好まれた時期には、前身幅とともに衽幅も広く、反対にタイトフィットが好まれた時期には、前身幅が狭くなるのとともに、衽幅も相対的に狭くなる。

衽幅と襟幅は、身丈が着用者の身長に合わせて設定されるのに対し、布幅と布からの裁ち出し方によっておおむねその寸法が決まるため、身長の違いに基づく個体差の影響が少なく、時代的な特徴がその数字に表れると考えられる。そこで、時代による衽幅・襟幅の変化を概観してみると、男女ともに、衽幅は、室町時代後期から江戸時代初期（1630年代まで）の小袖では22cm～24cm、江戸時代前期（1650年代）以降の小袖では20cm前後となる。襟幅は、1630年代までの小袖では14cm～15cm、1650年代から1790年代は13cm台、18世紀後半以降は10cm～11cm程度となる。

絹より布幅の狭い麻を生地とする帷子では、全体に小袖よりも幅が狭く、衽幅は、室町時代後期では平均18.6cm、江戸時代後期、19世紀前半では平均で17.0cmとなる。しかし襟幅は、1630年代までは平均14.1cm、18世紀後半から19世紀前半では平均11.4cmから11.5cmと大きくは変わらない。

## 2.3 立裓

「立裓」とは、衽に縫い付けられた襟の下端から衽の下部の裓先までの部分で、「襟下」「裓下」ともいう。すでに見たように、室町時代後期から江戸時代初期までとそれ以降の小袖形衣服では、後身幅が大きく変化したが、立裓もこれらの時期で大きく変化した。生地からの裁断の際にこの部分は生地幅の影響を受けないため、時代における好みをそのまま反映させることができるからである。

現存遺品から平均的な寸法を割り出すと、室町時代後期から江戸時代初期までは34cm～40

cmほどと短く、江戸時代前期以降は、17世紀後半から18世紀前半が50cm～70cm、18世紀後半以降は80cm～90cm台と長くなる傾向がみられる。

現代においては、立裓(襟下)は一般的には身長 $\frac{2}{3}$ とされているが、これは現代の和装が江戸時代後期のそれを基本的に引き継いでいるからである。そこで身丈に対する立裓の比率に注目すると、室町時代後期から江戸時代初期、1630年代までは0.25～0.42、江戸時代中期以降、18世紀後半が0.51、19世紀前半が0.54となり、現代の着物に近づく。

### 3. 「白地横縞模様木綿帷子」の形状の特徴と制作年代

第2項において、室町時代後期以降の近世小袖形衣服(小袖と帷子)について、形状の時代的变化の概要を述べた。本項では、第1項に示した、実地調査に基づく「白地横縞模様木綿帷子」の各部法量についての情報を、第2項に示した近世各時期の小袖・帷子の特徴に照らし合わせて、本作品の制作年代を考察する。

#### 3.1 後身幅・前身幅・袖幅

後身幅36.3cm、前身幅35.5cm、前身幅に対する後身幅の比は0.98である。室町時代後期、1550年代～70年代に制作されたと推測される上杉神社所蔵の伝上杉謙信所用の4点の帷子の後身幅は、33.0cmから35.0cmとややばらつきがあるが、平均では34.3cmを示す。また前身幅に対する後身幅の比は1.01～0.99である。

江戸時代・1620年代～30年代の作と考えられている川越喜多院所蔵の黒茶地小花模様小紋帷子は、後身幅32.4cm、前身幅31.7cmで、前身幅に対する後身幅の比は0.98である(註7)。また、間は少し空くが、18世紀後半の帷子3点では後身幅は平均30.7cm、19世紀前半の帷子6点では、平均28.8cm(註8)、後身幅に対する前身幅の比は、18世紀後半では平均0.86、19世紀前半では平均0.84となっている。

このように「白地横縞模様木綿帷子」の後身

幅、前身幅、前身幅に対する後身幅の比は、いずれも伝上杉謙信所用帷子と黒茶地小花模様小紋帷子の間に位置する数値を示している。

後身幅に対する袖幅の比についても、伝上杉謙信所用の4点の帷子ではすべて1.1、また黒茶地小花模様小紋帷子では0.98であるのに対し、本作品のそれが0.98であることから、やはり同様に位置づけられる。

#### 3.2 衽幅・襟幅

衽幅は、伝上杉謙信所用の4点の帷子では平均18.6cm、黒茶地小花模様小紋帷子では18.1cm、であるのに対し、「白地横縞模様木綿帷子」は18.0、襟幅は、伝上杉謙信所用帷子は平均14.1cm、黒茶地小花模様小紋帷子では13.8cmであるのに対し、「白地横縞模様木綿帷子」は14.2である。ここでも本作を黒茶地小花模様小紋帷子の近くに位置付けられる。

#### 3.3 立裓

立裓の法量は、伝上杉謙信所用帷子4点の平均が36.3cm、黒茶地小花模様小紋帷子が56.7cmであるのに対して、「白地横縞模様木綿帷子」は43.1cm。身丈に対する立裓の比率は、伝上杉謙信所用帷子の平均が0.25、黒茶地小花模様小紋帷子が0.42であるのに対し、「白地横縞模様木綿帷子」は0.32cmであり、再び伝上杉謙信所用帷子と黒茶地小花模様小紋帷子の間に位置する数値を示す。

#### 3.4 裁断方法

身頃、袖は生地 $\frac{2}{3}$ の両側が織耳となっており、生地幅いっぱいを使っている。右衽では身頃側(長辺)が織耳、打ち合わせ側(短辺)が裁ち目となっており、左衽では身頃側(長辺)が裁ち目、打ち合わせ側(短辺)が織耳となっている。また襟は片側織耳、片側裁ち目となっている。

室町時代後期から江戸時代後期に至る小袖形衣服(小袖と帷子)の裁断方法については、前

述の先行研究に詳しいが、それらに示された各種の裁断方法と比較すると、「白地横縞模様木綿帷子」における裁断方法は、黒茶地小花模様小紋帷子と同じであったと推測できる。

また、実物調査によって明らかになった法量からは、身丈の4倍の長さ(533.2cm)、袖丈の4倍の長さ(192.0cm)、衿丈(身丈から衿下がり)を引いた寸法)の長さ(124.8cm)、立袷の長さ(43.1cm)を足したものの以上の長さの反物で仕立てられていることがわかる。

### 3.5 制作年代

第1項で示した作品各部の法量と全体の形状、仕立ての特徴を、第2項で示した室町時代後期から江戸時代後期にいたる近世の小袖形衣服の形状変遷と比較すると、(1)後身幅と前身幅の実寸と両者の比率、(2)後身幅と袖幅の比率、(3)衿幅と襟幅の実寸、(4)立袷の実寸、及び立袷の身丈に対する比率、(5)生地裁断方法などから、仕立ての形式についていえば、江戸時代・1620年代～30年代の作と考えられている川越喜多院所蔵の制作年代とほぼ等しいか、幾分これよりも前の時期に、本作「白地横縞模様木綿帷子」は制作されたと推測される。

本作品は、石見(島根県)益田領主益田藤兼の次男で、毛利輝元につかえた益田元祥(1558-1640)が亡くなった際に着用していたと伝えられている帷子であるが、以上の考察から、帷子としての様式上の特徴は、益田元祥の晩年と重なりといえる。

ただし、この時期の木綿生地仕立てられた帷子は、管見の限り他に例を見ないため、この時期の衣服における木綿使用の実態の面からも検証を進める必要がある。次項では、木綿が庶民にまで普及した江戸時代中期以前の、特に室町時代後期から江戸時代前期にかけての武家階層における衣服への木綿の使用の実態について、現在筆者が知るところを述べる。

## 4. 広義の戦国期(室町時代後期～江戸時代初期)における武装への木綿使用

管見の限り、「白地横縞模様木綿帷子」は、戦国武将が着用した衣服のうち、戦衣以外の通常衣服に木綿が生地として使用された唯一の現存遺品であり、戦国期における武家階層の木綿使用の実態について知るための貴重な作品である。

そこで、まずはこの作品を除く、この時期における武将の衣服での木綿使用の事例について、過去に行った作品調査で知り得た内容(註9)を以下に示す。

### 4.1 木綿が袴の紐の芯として使用されている事例

我が国で綿の栽培が定着し始めたのは、先行研究により16世紀に入ってからと考えられている。また文禄年間(1592～1596)頃には大量の木綿の種が大陸から輸入されていたともいわれ、当時すでに一定のレベルにあった国内の綿作技術と合わせて、麻に比べて肌触りがよく保温性が高い木綿の使用が、この頃から広がっていったと推測される。とはいえ、当時、木綿はまだ限られた人々や用途のためのものであり、依然として庶民生活にまでは普及していなかったと考えられる。

翻って、広義の戦国期に当たる安土桃山時代から江戸時代初期の服飾に焦点を絞ってみると、(1)吸水性に富む、(2)濡れると10～20%強度が増す、(3)アルカリや熱に強い、(4)染色しやすい、(5)弾力性、伸張性に富む、(6)繊維断面が中空構造のため、軽く保温性に富み、肌触りが良いこと、などの特徴を持つ木綿は、戦場や陣中、または移動中に着用する衣服にとって好都合なものであったため、多く戦衣に用いられている。

その中で特に袴の紐の芯として用いられている事例が、3例見られることは、木綿が当時その実用性を認められながらも、同時にまだ稀少

な素材であったことを暗示している。

#### 4.1.1. 東北大学所蔵・伝豊臣秀吉所用袴

1点は、東北大学図書館所蔵の東北大学秋田家史料に含まれる「カルサン」と呼ばれる袴である。袴自体は、わずかに緑みを含んだ茶色の五枚縹子を表地に、紅平絹(練緯)を裏地に用いて、裕仕立てに作っている(挿図6)。破損が著しく当初の形状を必ずしも正確には推し量れないが、近世において「カルサン」と呼ばれた、南蛮風の袴に幾分類似した形状をなす袴である。

前腰と後腰には、太く撚った木綿糸を平らに並べ、これを表地の共布で包んだ腰紐を付けている。台形をなす後腰の腰当ての部分は、薄い正目の板を和紙で両側から挟み、これを芯にして、表地と裏地の間に入れている。腰当てのそれぞれ左右に上記の腰紐を挟み込むように付けるが、腰板の部分では、多くの木綿糸を合わせて作った一本の太い木綿紐で左右の腰紐を繋いでいる(挿図7)。

現状で前腰裏地に6枚の襷を確認できるが、表地の欠損が著しく、正確には確認できない。また外見上、裾口が幾分小さくなっているように見えるが、これも表地の破損が著しく確認できない。同じく現状では、足首部分を括るための紐は見られない。

裏地の紅平絹は、横切れが著しいことから、

経糸に生絹、緯糸に練糸を用いた練緯と考えられる。また縦糸は2本ずつが寄った羽二重経になっているが、こうした特徴は安土桃山時代の練緯にしばしば見られる。また表地は、鉄媒染による黒染め茶染めに特徴的な破損状況を示しており、同様の状況は、徳川家康所用と伝えられる胴服や陣羽織の裏地にも見られる(註10)。

外形においてカルサンに類似した部分もあるが、紀州東照宮に伝来する徳川家康所用のカルサンに比すと、裾丈が15cmほど長く、また腰当があるなど、異なる点も見られるため、ここではこの袴がカルサンであるとは言い切れず、通常の袴である可能性もある。しかし『太閤記』巻十五、文禄3年(1594)の「秀吉公異彩の御出立にて御遊興之事」には、「出立は、あらまし、きひろ袖のゆかた、志ゆすのかるさん、なんばんづきんをかぶつて」とあることから、縹子地のカルサンが安土桃山時代に存在していただけでなく、秀吉がこれを着用することがあったことが分かる。

上記の特徴から、本作品は安土桃山時代の作であると判断できる(註11)。

#### 4.1.2 島根県立石見美術館所蔵・茶麻裁付袴

室町時代から安土桃山時代にかけて石見(島根県の西部)の領主であった益田家に伝来したもので(註12)、麻地に柿渋を塗布し、刺し子を施した四幅袴(挿図8)。腰には共裂の腰紐



挿図6 袴全体



挿図7 腰紐の芯の木綿

を付ける。腰紐には浅葱地小紋染の木綿布を芯として入れている（挿図9）。小紋の模様は、片面糊置きで型付けして表されている。腰背面には木製の板を入れる。

膝から下は足首に向かって提灯形にすぼまり、裾口上部には韋製のボタンと乳が二カ所に縫い付けられている。膝下には麻の括り紐が縫い付けられている。また前面には小用のための穴があげられている。

仕立て上の特徴は、後面において、臀部及び大腿部に舟底形に裁断した生地を当てている点であり、内股部分にもこれよりも小型の舟底形の布が当てられている。こうした仕立ては南蛮服飾の影響を受けて生まれたものと推測され、類似した仕立てが安土桃山時代から江戸時代前期に制作されたと考えられる裁付袴にも見られる。

大腿部のフィット性を図って南蛮服の仕立てを取り入れていることに加え、以上のような実用的な工夫をきめ細かく施していることから、この作品の制作時期は、戦が日常茶飯であった室町から安土桃山時代、16世紀後半の作と考えられる。

この袴においては、糸を合わせた紐ではなく裂であるが、前出の袴同様、腰紐には木綿を芯として用いている。

#### 4.1.3 林原美術館所蔵・伝池田光政所用革裁付袴

前作同様の仕立て上の特徴を持つ革製の裁付袴が、岡山藩池田家伝来の服飾類に含まれている。この裁付袴は、一具をなす革製の胴服及び頭巾とともに池田光政（1609-1682）所用と伝えられるもので、戦国の記憶を残す時期に制作されていることから、仕立てなどにも古様を残していると考えられる。

「光政君 御召一切」と墨書する貼り紙のある木箱に革製胴服・革製頭巾とともに収納されている革袴で、革の表面は松葉を燻して濃い茶色に染めている。革を裁断し縫い合わせて成型



挿図8 袴全体



挿図9 腰紐の芯の小紋染木綿

しているが裏は付けられていない（挿図10）。左右足首の二カ所には同じ韋で包んだ釦と、これを通す穴が設けられている。また股間正面には、小用に備えた穴が同じく設けられている。

後ろ腰は板を両側から韋で包んで腰板としている。後腰、前腰とも茶染の木綿布を紐状に丸めて芯とし、同じ韋で包んで腰紐としている（挿図11）。

ともに伝わっている胴服と頭巾は革札を縫い付けた実戦的要素を非常に強く持つものであり、光政自身が17世紀前半の戦国の名残が残る時期に生きた人であることと合わせ、この袴も戦国時代の戦衣の実用性をとどめたものと言える。また伝承では岡山藩初代藩主の池田光政所用とされているが、長く一緒にいた父池田利隆のものであった可能性もある。いずれにしても袴の腰紐の芯として木綿が使用されている点に注目される。



挿図10 袴全体



挿図11 腰紐の芯の茶染木綿

#### 4.1.4 木綿が腰紐の芯に使用された理由

以上の事例では、木綿は袴の帯の芯という非常に限られた部位に用いられているが、それは、安土桃山時代及び江戸時代初期において、木綿の持つ機能的な繊維特性が十分知られていたこととともに、大名クラスの武将が使用するに値する価値観を認められていたことを示している。

木綿が、生き死が掛かる戦場で身に着ける袴の腰紐の芯に使用されているのは、足や腰の動きにとって重要な袴の特性に鑑み、激しく動く戦闘の際にも緩まず、また終日着用していても疲れないことが求められる腰紐の機能を重視してのことと考えられる。木綿は、伸縮性に優れ汗をよく吸うなどの特性を持つことから、このような部位に明確な目的をもって使用されているのである。

高知県立高知城歴史博物館には、山内一豊所



挿図12 山内一豊所用紙衣の陣羽織 (『土佐藩主山内家資料』高知県立高知城博物館・平成29年より転載)

用と考えられる紙衣の陣羽織(挿図12)が所蔵されているが、全体に和紙を用いた袷仕立てで、間に絹の薄綿を入れている。形状の特徴から明らかに安土桃山時代の作であることがわかるが、その立襟の部分には木綿が使用されている(註13)。陣羽織は野外で鎧の上に着用する衣服であり、終日地肌に触れる襟の部分にのみ木綿が使用されているのも、軟らかく防寒性のある木綿が襟には最適であったからであろう。

#### 4.2 木綿で仕立てた戦衣

以上は木綿が戦衣の一部に使用された事例であるが、これらに共通しているのは、一見何気ないように見えて、日常着ながら活動性を求められるカルサンや、生き死の掛かる戦場で長時間着装する裁付袴、陣羽織の非常に重要な部分に、木綿の特性を生かして使用されているということである。木綿とともに使用されている他の素材も、用途に応じて吟味されており、木綿が安価であるがゆえに使用されていたのではないことは明らかである。事実、戦乱が続いていた時期にあっては木綿の普及も大きくは進んでいなかったと推測される。

しかしながら、木綿を戦衣の全体に用いたものもわずかながら現存しているので、その事例も以下に紹介する。なお、個人所蔵・紺木綿地革札付羽織については、2015年度『家政学部紀要』所載の拙稿「新発見の「紺木綿地革札付羽織」の制作年代と用途に関する一考察」から、浅葱木綿地月丸扇模様羽織については、2016年度『家政学部紀要』所載の拙稿「近世初期武家服飾における木綿の受容に関する一考察 - 「浅葱木綿地月丸扇模様羽織」の制作年代と用途の検討を通して -」から適宜必要な部分を引用している。

#### 4.2.1 個人所蔵・紺木綿地革札付羽織

本作品は、羽織形の外形をなし、表地と裏地に木綿を使用して袷仕立てとし、更に表地には、亀甲型に切り出して漆を塗布した革製の小札をほぼ隙間なく縫い付けている。袖は、袂を付け、袖口を小さく開け、袂のかどを丸く作る。衿はなく、襟が身頃に直接縫い付けられている。襟は首回りから前身頃下部に至るが、前身頃が脇から襟付け部分に向かってやや前下がりに仕立てられているのに対し、襟の下部は水平に仕立てられている。ゆえに、後身頃の丈が前身頃の丈より短い（挿図13）。

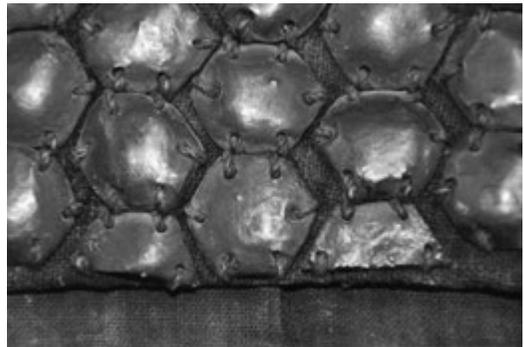
表地と裏地は藍で紺に染めた木綿。間に自然色の麻裂を芯として挟み、表面に黒漆が塗布された牛革と推測される革製の亀甲形（六角形）の小札（挿図14）を表地に縫い付けるが、小札を止め付ける紺木綿の糸は、表地と麻の芯をまとめて縫い通す（挿図15）。

亀甲形（六角形）小札は、現状で破損したものも含め3863個が現存するが、欠失した痕跡が残る75個分を加えると総計3938個に及ぶ。また身頃と襟の縫い合わせ部分や裾・脇の部分等には、必要に応じて亀甲形を半切したものが縫いつけられており、その数は、破損したものも含めて現存するものは172個、欠失したことが明らかな57個分を加えると229個を数える。

羽織の形状における特徴は、（1）袖幅と後



挿図13 羽織全体



挿図14 革小札



挿図15 表地と裏地の間に麻布

身幅の比が、約1対1.7であること、（2）後身丈が前身丈に比べて8.3～9.9cm程度短い点、（3）袖口が小袖仕立てになっている点、（4）襟を表に反して着用する仕立てになっている点、（5）袖下から裾にマチが設けられている

こと、(6) 前身頃に共裂の胸紐が付けられていることである(挿図16 描き起こし図1)。これを、形状が類似する室町時代末期から安土桃山時代の胴服(羽織)・陣羽織と比較すると、この羽織が安土桃山時代の制作になるものと推論される(註14)。

また本作品の最も大きな特徴である、革製漆塗の小札については、生地としてこれとともに用いられている木綿及び麻との機能上の関係性が興味深い。

革製漆塗の小札は言うまでもなく刀剣に対する防御の機能を担っており、軽量の革に漆を塗布してその実用性を高めている。また、表地と裏地に用いられている木綿は防寒性を配慮しての事である。そして、麻芯が表と裏の木綿地の間に挟みこまれているが(挿図15)、これは、伸縮しやすい木綿が、革札を縫い付けた際に縫い糸に引っ張られて配置が不規則にならないように、また小札を固定する木綿の縫い糸をきつく引き絞りに、硬く固定できるように、と考慮してのことと考えられる。これは結果として、着装しての移動や不意の戦闘行為に際し、小札が微塵も動くことなく、しっかりと固定されていることをもたらし、防御という実用面でも重要な役割を果たすことになる。

(法量・縫製・生地)

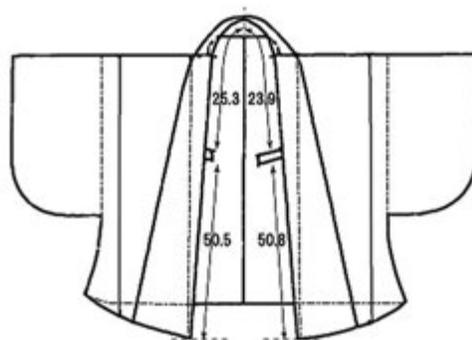
本作品は芯として麻が使用されている以外は木綿を用いて仕立てられているが、その使い方にも特徴が見られ、更に使用されている木綿が朝鮮からの輸入品である可能性もあるため、法量を記す。

表地は、背面では幅10.8cmの紺木綿を背中央に配し、左右にこれを挟んで幅32.6cmの同じく紺木綿2枚を配して後身頃の大半を形成する(挿図18 描き起こし図3)。左右に配された生地は、肩山をまたいで前に折り返され、襟部分を切り取り、左右それぞれ幅27.5cmと幅28.5cmを残して前身頃の大半を形成する(挿図17 描き起こし図2)。これら左右の裂の外側には更

に左右それぞれ幅29.7cm、28.5cmの紺木綿裂を継いで、肩山をまたいでマチを含む前後身頃の一部と袖を形成する(挿図17 描き起こし図2)。

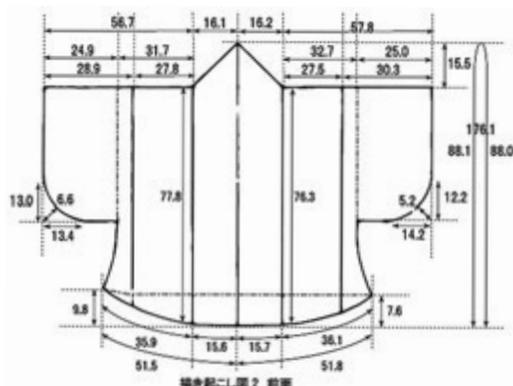
裏地は、背面では中央に幅14.7cmの紺木綿地を挟んで左右にそれぞれ幅31.6cm、幅31.7cmの紺木綿を両側に配し、これを肩山で折り返して前身頃の裏地とするが、前身頃では袖付けを配慮して2cmほど幅が狭くなっている(挿図19 描き起こし図4)。

身頃の外側の袖裏には、左右それぞれ幅28.2cm、幅27.0cmの同生地を肩山で折り返すように配す。またマチの部分は、ワナが脇に来るように二つ折りした紺木綿裂(上方幅7.3cm、下方幅17.7cm)を身頃裏裂の袖下部分に縫いつない



描き起こし図1 羽織

挿図16 描き起こし図1



描き起こし図2 前身頃

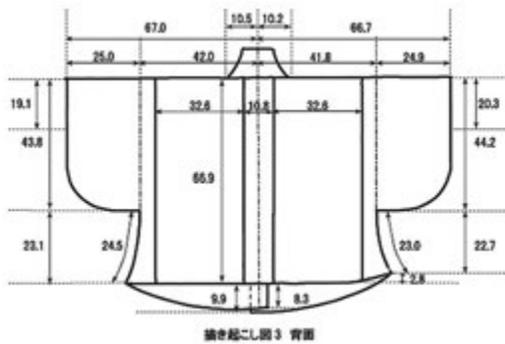
挿図17 描き起こし図2

で作る (挿図19 描き起こし図4)。

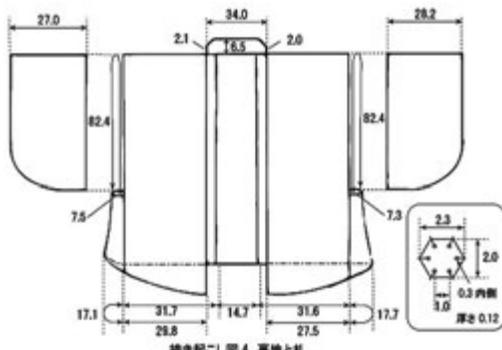
表地裏地とも縫い代の寸法は不明。また芯の麻地も、どのように生地を縫い繋いでいるかは不明。

襟は身頃、袖と同裂または近似の紺木綿裂を二つ折りして表裏とし、肩付近では左右それぞれ幅16.2cm、幅16.1cm、裾付近では幅15.7cm、幅15.6cmに仕立てている (挿図17 描き起こし図2)。

以上のことから、使用されている木綿生地は縫い代寸法が不明ながら33cm弱であったと推測される。



挿図18 描き起こし図3



挿図19 描き起こし図4

書き起こし図 (拙稿「新発見の「紺木綿地革札付羽織の制作年代と用途に関する一考察」から転載)

#### 4.2.2 浅葱木綿地月丸扇模様羽織

羽織形の外形をなす本作品 (挿図20・21) は、後身頃と左右の前身頃、両袖と襟からなる。袖は広袖仕立てで、衽はなく、襟が身頃に直接縫い付けられている。また後身頃と前身頃の丈はほぼ同寸で、後身頃には背割りはない。

前身頃は肩に近いほど細く、裾に向かって広がっており、あたかも衽が付けられているかのような台形の形状をなすが、台形の上部では、余った布は襟下に隠されている。

襟は広襟で、首回りから前身頃下部に至る。二つ折りされた折目が残っているが、均等ではない。襟の下部は前身頃と同様、水平に仕立てられている。

総体は木綿のひとえ仕立てで、前身頃の胸の位置に6つ、後身頃の背の位置に7つ、染による月丸扇模様を配している。このような形状をとる衣服としては胴服が想起されるが、胴服は小袖の上に主に防寒、防塵のために着用する衣服であり、多くは真綿を入れて袷に仕立てる。本作のようにひとえ仕立てのものは、ほとんではない。

一方、ひとえ仕立てであることに加えて、袖に袂を作らず広袖に作られていることから、鎧の上に着用する陣羽織であると考えられる。また後に示す法量において、袖幅と身幅 (後身幅) の比が約1対1.7であることから、制作年代を室町時代末期から江戸時代初期に想定することができる。事実、後に本稿5.1.1で紹介するように、『太閤記』巻十八に見られる竹中半兵衛着用の陣羽織に本作に類似した特徴が見られる。

#### (法量・縫製・生地)

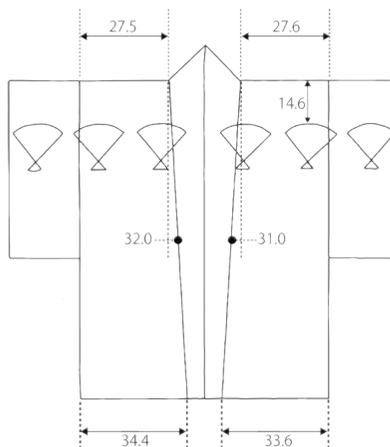
詳細は描き起こし図 (挿図22 描き起こし図1、23 描き起こし図2) を参照願いたいだが、下記に本作品の特徴が現れている部分、及び時代判定の基準となる部分の法量を示す。

身丈は、前身・後身ともに、88.4cm。袖丈は、(右) 47.1cm、(左) 46.9cm。後身幅は、(右肩) 34.5cm、(右裾) 34.1cm、(左肩) 34.0cm、(左裾)

伝益田元祥所用「白地横縞模様木綿帷子」（個人蔵）に関する一考察



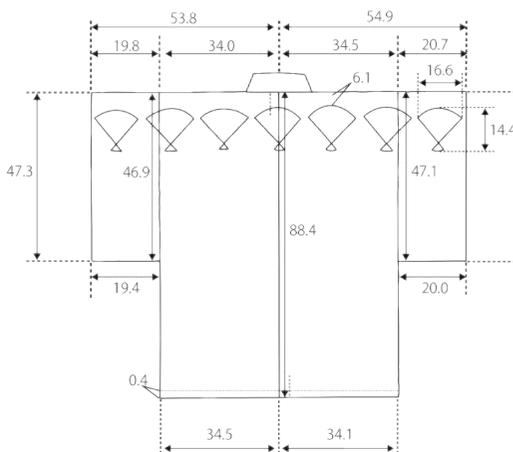
挿図20 前面



挿図22 描き起こし図1



挿図21 背面



挿図23 描き起こし図2

34.5cm、前身幅は、(右肩) 27.5cm、(右裾) 34.4cm、(左肩) 27.6cm、(左裾) 33.6cm、右袖幅(上部) 20.7cm、(下部) 20.0cm、左袖幅(上部) 19.8cm、(下部) 19.4cm。

襟幅は、(肩部) 12.0cm、(右裾部) 11.8cm、(左裾部) 11.2cm。襟の折り目は、外側から、(肩部) 4.5cm、(右裾部) 8.8cm、(左裾部) 5.5cm。

肩山から(右) 32.0cm、(左) 31.0cmの位置に胸紐を縫い付ける。胸紐は、右が(長さ) 15.4cm、(幅) 1.2cm、左が(長さ) 16.2cm、(幅) 1.1cm。

生地は、左右身頃とも、背縫い側も脇縫い側も織耳となっており、使用されている木綿生地は織幅が35.0cmであることが分かる。左右身頃の法量もこれに比較的近い数値を示しており、木綿布をほぼ織幅いっぱいを使って仕立てられている。

背縫い・脇縫い・袖付け・襟付け・裾端、いずれも麻糸で縫われており、背縫いは、左右両身頃の裂を中央で合わせ、縫い代を取って、そのもとを波縫いしている。脇の縫い代は0.2cm。ま

た裾端は三つ折りして波縫いしている。三つ折りの幅は0.4cm。

袖口は織耳のままで、袖付け部の袖側は裁ち目をかがり、身頃側は織耳のままで、両者を合わせて波縫いする。袖下は表裏両裂それぞれの裁ち目をかがり、両者を合わせて波縫いする。襟は、身頃との縫い付け部分が裁ち目で、外側は織耳になっている。襟付けは、襟は裁ち目をかがり、身頃はそのまま、両者を合わせて波縫いする。

縫い代を含まない袖幅（最大20.7cm）と襟幅（最大12.0cm）の法量を合わせると、縫い代を含まない後身幅（最大34.5cm）に比較的近い値となる。脇の縫い代が0.2cmであることから、他の部分でもほぼ同寸の縫い代をとったとすれば、袖の縫い代と襟の縫い代を合わせれば0.4cmほどとなり、これを後身幅（最大34.5cm）の寸法に加算すると、さらに生地織幅に近くなる。

紐は左右とも、前身頃と襟の縫い合わせ部分に挟み込むように縫い付けられている。紐自体の輪奈は、紐の用裂を中表にして二つ折りし、裂の両端を波縫いしたのち表に返して作っている。

## 5.1 近世初期における木綿の普及状況について

紺木綿地革札付羽織及び浅葱木綿地月丸扇模様羽織においては、白地横縞模様木綿帷子同様、木綿布が使用されている。これらに用いられている木綿生地の織幅は、前者が33cm弱であり、後者が35.0cmであるのに対し、今回調査した益田元祥所用と伝えられる白地横縞模様木綿帷子は37cm前後である。

このように使用されている織幅の違いがあることについては、安土桃山時代から江戸時代初期においては、木綿布は、絹布のように量産されておらず、織幅の基準ができあがっていなかったと考えるのが妥当と思われる。木綿生地が商品として流通するまでは規格といったものが明確でなかった可能性が高い。またこの時期

の木綿布については、朝鮮からの輸入も先行研究によって指摘されているが、その質や織幅などについての詳細は不明である。

本項では、日本における木綿利用の概略をたどったのち、戦国期と俗称される安土桃山時代から江戸時代初期の武将の木綿使用の実態について考察しようと思う。

### 5.1.1 日本の木綿栽培と普及

木綿の種子が日本にもたらされた時期については、『類聚国史』（寛平4年<892>成立）や『日本後記』（承和7年<840年>成立）の記事から、延暦18年（799）に三河国に漂着したインド人が日本に初めて木綿を伝えたとする説がある。ただこの時には、木綿の栽培はうまくいかず、定着しなかったと考えられる。鎌倉時代の公卿で歌人である藤原家良（1192-1264）の歌に、「しきしまややまとにはあらぬから人のうゑてしわたのたねはたえにき」『新勅撰和歌六帖』（寛元二年<1244>6月頃成立）と見えるからである。

これに対して中国では、早くから木綿の栽培が行われ、綿布をつくることに成功しており、その影響で朝鮮半島でも16世紀には木綿の栽培に成功していたと考えられている。室町時代、日本ではまだ木綿の栽培は広まっていなかったため、木綿が糸や布の形で中国や朝鮮半島から輸入されていたらしい。応仁2年（1468）に輸入木綿をあつかう布座、小物座が専売権を争ったという記録が残っているとされる。ただしこの時代の綿布の現存品は管見の限り見られない。

ただ室町時代・15世紀の舞楽装束、高野山天野社伝来・紫平絹地調模様半臂（東京国立博物館蔵）の胸紐に木綿の撚紐が用いられているほか、16世紀の能装束には、中国製の黄緞と呼ばれる木綿と絹の交織織物が使用されており、これらが金襴や銀襴同様の扱いを受けていることから、当時における木綿の希少性が窺われる。

さらに室町時代末期から安土桃山時代にかけては、朝鮮半島から無地の綿布が輸入されるよ

うになったと考えられているが、現存品はすべて武将クラスの武家の所用品である。

木綿の繊維特性に基づく前述の利便性が、生死にかかわる戦場で過ごす時間が長いこの時代の人々には大いに重要視されたが、当時としてはまだ希少な素材であったために、限られた人々のみが使用できたのであろう。

応仁の乱などを経て、戦衣の素材としての綿布の機能が認知され始めると、国内で生産が本格的には始まっていなかった木綿の布を朝鮮から求めようと、大名たちが競い始めたと思像される。ここで活躍したのが、朝鮮から大量の木綿布を輸入した対馬の宗氏であるとされる。(註15)。

戦国期となる16世紀後半は西欧においては大航海時代でもあり、日本においても特に南蛮貿易によって、ヨーロッパの染織製品だけでなくインドやインドネシアから木綿の生地や様々な染織製品がもたらされた。

天下人となった豊臣秀吉(1536-1598)は、ポルトガル人によってもたらされた羅紗や天鷲絨、ペルシャ絨毯裂を用いて仕立てた陣羽織を着用しているが、インド産と推測される木綿のキルト地で仕立てた白木綿地桐紋付陣羽織も着用しており、当時においては木綿も羅紗やビロードに近い価値観をもって見られていたことがわかる。

我が国で綿の栽培が定着し始めたのは、先行研究により16世紀に入ってからと考えられている。また文禄年間(1592-1596)頃には大量の木綿の種が大陸から輸入されていたともいわれ、当時すでに始まっていた国内の綿作と合わせて、麻に比べて肌触りがよく保温性が高い木綿の使用が、この頃から広がっていったと推測される。とはいえ、木綿は限られた人々や用途のためのものであり、依然として庶民生活にまでは普及していなかった。

おそらく戦国期においては、秀吉などの大名はヨーロッパ人を通じてもたらされたインド更紗のキルトなどの加飾を施された木綿布を、

大名や武将などは木綿生産技術が進んでいた朝鮮・中国などから輸入された木綿布を陣羽織などの戦衣に用いたであろう。一方、下級武士や武家配下の足軽などは、ようやく国産が始まりつつあった並み質の木綿で仕立てた簡便な陣羽織を着用したと推測される。

### 5.1.2 安土桃山・江戸時代初期における木綿の使用

木綿が安土桃山時代に武将の戦衣に使用されていた例としては、『太閤記』巻十八に見られる下記の記事がそれをうかがわせる。

○竹中半兵衛尉(中略) 戦場(センヂヤウ)之出立(いでたち)は、静(シヅ)かなる馬に乗(のり)、虎(トラ)御前(ゴゼ)と云刀元重を常(ツネ)の如くにさし、具足(グソク)は馬皮(バビ)のうらを表(ヲモテ)に用ゐ、つぶ漆(ウルシ)にてあらくとぬりたるを、あさ黄(ギ)の木(モ)綿(メン)糸にておどし立(たて)、甲(かぶと)は一(いち)の谷(た)にの立物(たても)打たるを猪首(イクビ)に着(キ)なし、餅(モチ)の付たる青(アサ)黄(ギ)之木綿(ノ)筒服(ドウブク)を長々と打はをり、ゆらりと打見えしなり。<( )は原文のルビ、下線部筆者>

とあり、竹中半兵衛(豊臣秀吉の家臣、1544-1579)が、馬革に漆を塗布した小札を浅葱の木綿糸で威した具足を身に着け、その上に、紋の付いた浅葱木綿の「筒服(ドウブク)」を着ていたと述べているが、具足の上に着用していることから、ここで「ドウブク」と呼ばれているものは、実際には胴服(註16)ではなく、羽織形をした陣羽織であったと推測される。

この記述では、馬革に漆を塗布した小札を浅葱の木綿糸で縫い付けているものは具足であるが、前出、紺木綿地革札付羽織は木綿の生地にこれを行っている。またその上に、紋の付いた浅葱木綿の陣羽織を着ていたとあるが、これは

同じく前出、浅葱木綿地月丸扇模様羽織に近い。これら両者を竹中半兵衛の具足、陣羽織と比較すると異なるところは見られるが、それぞれについての論考によって制作年代はこれに近いことが明らかになっている。

また、前者は、武将クラスの人物が具足を着用しないで騎馬する際に着用したと考えられるものであるのに対し、後者は足軽クラスの人物に対して支給された簡便な陣羽織であると推測される(註17)。

ただし、これら2点に使用されている生地にも際立った外見上の違いが見いだせないことに加え、現存遺品の中に、付属する資料などから、朝鮮(または中国)から輸入されたことが明らかかな木綿布も、国産であることが明らかかな木綿布もないことから、これらのいずれも輸入品か国産品かの判断はできない(註18)。

翻って白地横縞模様木綿帷子に使用されている木綿布については、布幅がこれら2点よりも広いことと、太い緯糸を規則的に配して横縞を表していることが、異なる点として指摘できる。しかし近世初期における輸入木綿について情報が非常に少ない現状にあって、この作品に輸入木綿布が用いられていると判断することはできない(註19)。

### 結びにかえて

江戸時代に入り、寛永5年(1628)には幕府が、「百姓の衣服に使用してよいのは布木綿まで、名主及び百姓の妻女は紬まで使用していいが、それ以上の贅沢は許さない」という触れを出す。木綿が庶民レベルまで普及し始めるのは、この時点を持たねばならなかったと思われる。

また寛永13年(1636)の朝鮮通信使の来聘に際し、朝鮮王から縞子や「照布」(上質の麻布)が進物とされたのに対し、幕府からは「綿衣」が礼物として贈られている。これは、この時期に至って、国産の綿布が外交上の進物に値する質に達していたことを示すものと解することができる。江戸時代初期の慶長年間(1596年～

1615年)には、知多木綿の江戸送りが始まっていたと伝えられているが、実際には、幕政が安定してくる寛永期あたりが、木綿普及の転機であったのであろう。

近世における木綿使用は、この時期以降急速に普及し、やがて「木綿は庶民の繊維素材」というイメージを持たれるほどになる。木綿の栽培も広がって、地名を冠した木綿が商品として流通するようになる。

もとより日本の風土に合った木綿の品種とそれにふさわしい栽培法が国内に根付いたことが、木綿の生産性を急速に拡大し、さらにそれが木綿布を庶民でも使用できるほどの安価な衣服素材とすることに導いたわけだが、「木綿=庶民」というイメージがあまりにも強いために、美術史的研究において、木綿と武家を結びつけて考えることを難しくしている現実がある。

例えば、木綿で仕立てられた羽織や小袖が新たに発見された場合、これが木綿性であることを理由に、江戸時代の庶民(町人を含む)のものとして無批判に判定されてしまうことがある。それは、江戸時代初期以前の木綿製の服飾品の現存例が極めて少ないことが第一の要因であり、第二には、江戸時代中期以降、木綿が庶民に普及してしまったのちは、身分に応じた衣服を着用すべきとされた封建的時代において、支配階層はそれにふさわしい高価な素材(絹)をもっぱら用いて、木綿をごく限られた用途以外には用いなくなったからである。

そもそも木綿は、その実用性において戦国時代には戦衣に使用され、当時においては入手しにくい繊維素材であったがゆえに、支配階層である武家が多くこれを用いた。戦乱にまみれた安土桃山時代の服飾品の現存数が、平和な江戸時代の服飾品に比して圧倒的に少ないことも、安土桃山、江戸時代初期の木綿使用の実態をわかりにくくしていると考えられる。

筆者は、幸いにして近年、戦国時代から続く旧大名家に伝来した服飾資料を調査する機会を多く得たが、その際、しばしば木綿を使用した

衣服が未調査のまま収蔵されていることを発見した。最近の調査になる白地横縞模様木綿帷子以外にも、そのいくつかをこの論文中で紹介したが、紹介していないものもある。

例えば、永青文庫所蔵の「鳥毛九曜紋付陣羽織」と「鳥毛無紋陣羽織」は、ともに安土桃山から江戸時代初期に制作年代が想定される陣羽織で、ともに首回りを除く表面の全面は、木綿を台裂として鳥の羽根を留め付けている。前者は、間に和紙と薄綿を挟んで襦子の裏地を付けた四重構造となっており、後者は襦子の裏地のみを付ける。

また、文化学園服飾博物館所蔵「鳥毛陣羽織」は、制作年代を17世紀初頭に想定できる作品であるが、この作品では裏地に木綿布が使用されている。

これらは今後調査を要する作品であり、今後もこの時期の作品調査を通じて、木綿使用の実態をさらに明らかにしていきたいと考えている。

## 付記

この論文は、2020年度東京大学史料編纂所一般共同研究「中近世山陰西部における曹洞宗寺院の諸関係―石見国妙義寺を中心に―」(研究代表者 中司健一)の一環として、益田市教育委員会の依頼を受けて実施した調査の成果である。

論文中に挿図として掲載した描き起こし図は、川井結花子・関智子氏によるものであり、高知城博物館蔵「白木綿地陣羽織」についての情報は、丸塚花奈子氏の提供による。

## 謝辞

本稿のきっかけとなった調査の機会を与您ていただきました、作品のご所蔵者様、益田市歴史文化研究センター主任、中司健一様、調査のための場所をご提供いただきました萬福寺様に心より感謝申し上げます。

註1 現在の和裁における「襟肩明」×2の寸法を示す。

註2 江戸時代中期の国学者塙保己一(1746-1821)の『武家名目抄』以下、文化7年(1810)~文化9年(1812)に刊行された本居宣長の随筆『玉勝間』や天保から嘉永年間成立の喜田川守貞の『守貞漫稿』などにそのように記されている。

註3 絹で言えば、練緯か紗綾か綸子か、襦子か縮緬かなど。

註4 鹿の子絞りか匹田鹿子か、友禅染か白上げかなど。

註5 総模様か腰模様か裾模様かなど。

註6 この傾向を受けて、町人女性の小袖・帷子の着装においては、外出時に「おはしより」を行うようになる。

註7 水上嘉代子「黒地小花模様小紋帷子について」『ミュージアム』第519号(1994年・東京国立博物館)所載。

註8 河村まち子・北島恭代「江戸時代着物の裁ち方に関する一考察」『共立女子大学家政学部紀要』第38号(1992年・共立女子大学)所載。

註9 詳細は、「近世戦衣における木綿及び皮革の使用実態」『平成元年度総合文化研究所紀要』平成2年3月参照。

註10 東京国立博物館所蔵・水浅葱練緯地鳶模様三葉葵紋付辻が花染胴服の裏地など。長崎巖「東京国立博物館蔵・水浅葱練緯地鳶模様三葉葵文付辻が花染胴服について」『MUSEUM』第585号(東京国立博物館、平成15年)参照。

註11 本作品の詳細については、拙稿「東北大学所蔵秋田家資料 伝豊臣秀吉所用茶襦子地袴について」『東北大学附属図書館調査研究室年報』第8号・東北大学附属図書館、参照。

註12 茶麻地緞り織胴服(室町時代・16世紀後半)、及び継ぎ合わせ麻地陣羽織(江戸時代・18世紀)などとともに益田家に伝来した。

註13 慶長10年に土佐高知藩主山内家2代となった山内忠義<1592-1665>所用とされる紙子陣羽織も、この作品に類似した形状と仕立て

となっている。

註14 この作品についての詳細は、「新発見の紺木綿地革札付羽織り（こんもめんじかわざねつきはおり）の制作年代と用途に関する一考察」共立女子大学『共立女子大学家政学部紀要』第62号（平成28年）参照。

註15 荒木和憲「中世対馬における朝鮮綿布の流通と利用」『中世の対馬－ヒト・モノ文化の描き出す日韓交渉史－』（アジア遊学177、勉強堂、2014）吉川弘文館・2004年）。

註16 胴服（「どうぶく」または「どうふく」と読まれる）、は、大名や武将クラスの武士が、主に外出時や野外で騎乗する時などに小袖の上に羽織るコートのようなもので、もとは「道服」と表記され、上半身を覆うものであることから、後に「胴服」とも記されるようになった。これはまた「はおり」とも呼ばれ、江戸時代には「羽織」と表記されるようになったが、胴服と同義であった安土桃山時代の羽織と江戸時代の羽織には内容に微妙な違いがある。

註17 詳細は、「新発見の紺木綿地革札付羽織

の制作年代と用途に関する一考察」及び「近世初期武家服飾における木綿の受容に関する一考察－「浅葱木綿地月丸扇模様羽織」の制作年代と用途の検討を通して－」参照。

註18 高知城博物館所蔵・山内一豊所用「白木綿地陣羽織」は背面袖口から背縫いまでが一枚の木綿布で仕立てられており、その寸法が48.8cm、縫い代が左右それぞれ約1cmであることから、布幅は約51cmと推定される。紺木綿地革札付羽織の布幅が33cm弱、浅葱木綿地月丸扇模様羽織の布幅が35.0cm、白地横縞模様木綿帷子の布幅が37cm前後であるのと比較するとかなり広いことから、朝鮮あるいは中国から輸入された木綿布はこうした広幅のものであった可能性が高い。

註19 前出、荒木和憲「中世対馬における朝鮮綿布の流通と利用」においては、朝鮮における木綿布の織幅については、文献資料の記述に基づいて経糸の本数で記述されているが、実寸で記されていないため、現時点では織幅ではこれを判断できない。